

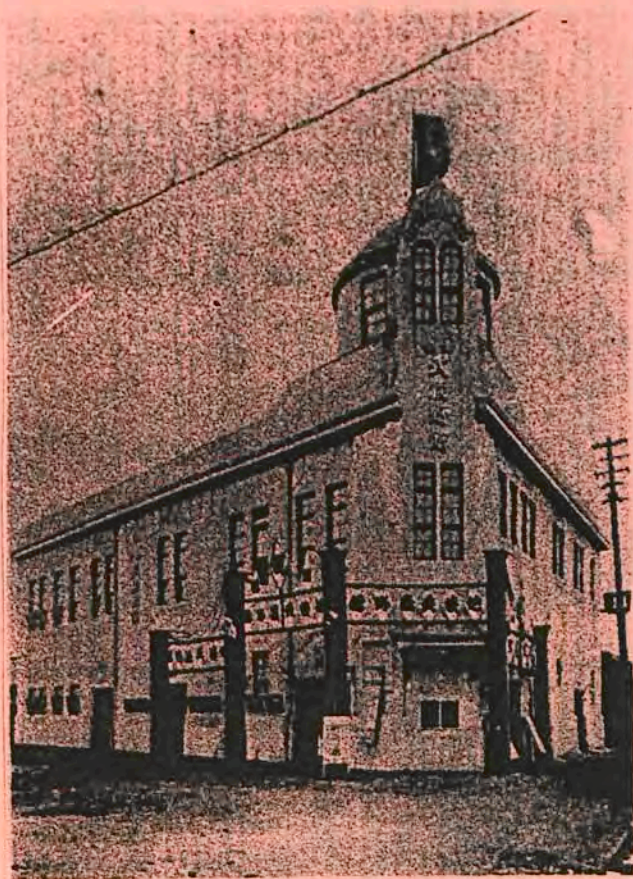
かたりべ60

豊島区立郷土資料館だより

大正時代の映画館

今でこそ「娯楽の街」・「映画の街」として有名な池袋も、映画が都市民の娯楽として浸透しはじめた大正時代には、浅草・銀座・新宿などに遅れをとっていました。この頃、現在の豊島区にあたる地域には、新宿駅前にあった有名な映画館と同名の池蔵野館をはじめ、平和館（駒込）・巣鴨館（巣鴨）・オヤマ館（大塚）・巣鴨劇場（西巣鴨）・池袋平和館（池袋駅前）・洛西館（長崎）の七館がありました。

池袋武蔵野館（左の写真）は、大正一一（一九二二）年の五月に、池袋駅東口の駅前が開館しました。入場定員は四一〇名を誇り、北豊島郡域随一の封切り（今でいう「ロードショー」）館として有名でした。上映される映画は新宿の武蔵野館が洋画中



心であったのに対し、開館当時は松竹キネマ（後の松竹映画）と契約して、松竹蒲田撮影所製作の映画を上映していました。

一方洋画は、同じ池袋駅前にあった池袋平和館（二年四月開館）で上映されていました。（伊藤）

寄席と映画館

ゝ 娯楽のうつりかわり

当館では、一九九四年に「テレビがなかったころ落語と映画は娯楽の王様だった」という特別展を開催しました。その後今日までに、区民の方々や映画関係者のご協力により新しい資料が多く寄贈されました。そこで今回「寄席と映画館」と題して、再び映画と寄席に関連した収蔵資料展を企画しました。この展示を通して、都市における娯楽の変容と都市化との関連について考える機会としたいと思います。以下、概要を紹介します。

(1) 名画座の風景

名画座は独自の上映プログラムと低料金に支えられて、多くのファンを集め、映画文化の底支えをする重要なポジションにあったとも言えます。名画座の内部といえば、古ぼけて薄汚れたイメージがありますが、それは「手作りの娯楽」を提供していた「あかし」でもあります。

(2) 娯楽文化の萌芽

江戸時代末期の寄席の数は、約四百軒とも七百軒ともいわれます。その後、明治時代になると、都市への人口の流入とともに寄席が数も増加していきます。豊島区地域に寄席が建ちはじめたのは大正時代の中頃であったと思われます。一七七年には一軒も見当たりませんが、二一年頃には四軒、式拾六には九軒を数えるまでになりました。

(3) 戦争と娯楽

一九三七（昭和一二）年、日中戦争に突入すると娯楽も国家の統制下に置かれて、寄席も映画館も娯楽施設というよりも「社会教育機関」という認識から、大きな変化がもたらされました。

寄席では、新体制落語・国粹落語というジャンルを演じ始め、「時局」にふさわしくないして「廓・酒・妾」に関するネタの禁演落語五三種を「はなし塚」に葬りました。一方映画も、寄席と同じく

積極的に国策宣伝のために利用されました。映画の巻頭には「挙国一致」や「銃後を護れ」などのスローガンを挿入し、映画法が成立し、映画の製作も配給も完全に国家権力の下に置かれました。

(4) 娯楽の復活

戦後、豊島区にいち早く設置された映画館は、池袋駅東口に建てられた山手映画劇場です。1日8回の上映で1万人の人々を集めたこともありました。

(5) 映画館街さまざま

映画の街は、むろん池袋だけではありません。浅草にあった大勝館、新宿の武蔵野館、丸の内の邦楽座、神田小川町の南明座などでした。

(6) 「娯楽の街」池袋の形成

戦後、映画館の数は一九五〇年代の後半には三八館に上り、「娯楽の王様」として君臨します。ところが、五八年を境にテレビの影響による映画観客動員数の激減により映画館は減少します。しかし現在も、落語定席の寄席や名画座のある池袋は「娯楽の街」という顔を持ちつつ保っているのです。

(伊藤)



郷土資料館では、郷土に関する図書をおよそ二万八千冊所蔵しています。これは、小さな専門図書館の蔵書数にも匹敵する冊数です。

収蔵図書の内容は、全国の博物館・研究機関等が発行する図録や紀要などの出版物がその半数程度を占めています。これらは、当郷土資料館が発行する出版物と交換して収集しています。また、調査・研究のために必要な専門書や、皆さんからの質問にお答えするためのレファレンス用図書も購入しています。それから、昭和三十年以前に出版された貴重な図書も収蔵しています。貴重書のなかに

は区民の皆さんから寄付されたものもたくさんあります。これらの貴重図書は展覧会で展示品として活躍することもあるのです。

図書の目録化は、まだまだ進んでいませんが、以下の二冊の目録があります。

①『豊島区立郷土資料館収蔵資料目録 第七集 郷土関係図書目録Ⅰ』豊島区教育委員会 発行 一九九四年

この目録では、一九九三年十二月末までに当館で収蔵した図書のうち、豊島区と東京都で発行された図書(二一六〇冊)を収録しています。

②『豊島区立郷土資料館収蔵資料目録 第八集 郷土関係図書目録Ⅱ』豊島区教育委員会 発行 一九九六年

この目録では、同じく一九九三年十二月末までに当館で収蔵した図書のうち、東京都区市町村で発行された図書(三一四八冊)を収録しています。

これら二冊の目録は、豊島区立の図書館で御覧になれます。中央図書館には郷土関係図書コーナーが設けられ、各種の郷土関係図書が利用出来ます。郷土資

料館で発行された書籍も利用することができます。

しかし残念ながら、郷土資料館では図書のための十分な配架スペースと閲覧場所が確保できない状況にあるのです。

当資料館へ調査・研究にいらつしやる方には、手狭ですが作業室が必要に応じて閲覧していただいています。図書は何ヶ所かに分けて収蔵庫等に収納していますので、事前に電話などで利用図書をお知らせいただければ、スムーズに利用していただけます。

また、閲覧はしていただけるのですが、図書をお貸しすることが出来ません。それは、資料館の図書は、資料としての性格が強いために、保存に気を配らなければならぬためと、再度入手し難い図書が多いためなのです。

図書は、毎年一五〇〇冊ほど増え続けています。その多くが一般の書店で手に入らないような図書です。将来、皆さんにこれらの図書を十分に活用していただけるように、日々、整理・目録化に励んでいます。

「山内」

《となりぐみ》

《戦時下の区民生活》

アンケートから

郷土資料館二〇〇〇年度第一回収蔵資料展『戦時下の区民生活―となりぐみ―』

は七月一八日〜九月一六日に開催されました。この展示は、区民の方から寄贈いただいた戦時中の町会・隣組関係の資料を中心にしたものです。構成は次のとおり。

▽“となりぐみ”とは？

▽お金とモノの動員

▽配給と“となりぐみ”

▽空襲と防空

▽“となりぐみ”の再編と廃止

※空襲被害

※学童疎開

次に、お寄せいただいたアンケートから、いくつかをご紹介します。

○戦時下や敗戦直後の状況がよくわかります。焼夷弾の実物、空襲後の焼野原の状況（写真）、隣組が果させられた役割、戦後の廃止再編、いろんな方法による国民からの資金や資材の調達など。有難う

ございました。「男・七〇歳代」

○今まで戦争について知っていたことは、国単位のものなどでしかなかったのですが、この展示で、地域についての戦争について知ることができたように思います。隣組の役割や債券について、配給・切符制など、こまかな様子を学んで、前よりは当時の地域の人々のくらしが理解できたように思いました。「女・学生」

○「となりぐみ」は、国から命令されて動いたこと、住民から軍備材料として金属の物を集めていたこと、学童疎開の様子などいろいろ分かりました。「女・中学生」

○今、とても平和に普通の生活を送っているが、昔、老人方の話を聞いていた事を思い出した。もしこれからの日本で戦争が起きたらどうなるか恐ろしかった。

何があっても世界平和を願います。「女・三〇歳代・会社員」
○町会つき合い、近所つき合いが薄れて

いく今日、地域社会のつながりが活発だったころへの憧憬があります。しかし、国からの強制によって参加させられた“となりぐみ”に対しては、抵抗感を感じました。「男・学生」

○戦争というと、空襲とかに視点がいきがちですが、“となりぐみ”に着眼し、戦中の庶民のくらしを展示したことはよかったと思う。戦中の人々のくらしを具体的にイメージできました。配給品の内容を記した隣組の記録は、はじめて見ましたが、その当時のことを生々しく伝えるものとして、興味深かったです。

◎関連して歴史講座『戦争と宣伝』が次のように開催されました。

第一回（八月一七日）

『週報』と『写真週報』

第二回（八月二四日）

メディアと隣組

第三回（八月三一日）

戦時下のプロパガンダ映画

参加者は六名でしたが、講義や映画のあと、熱心に質疑や経験談をかわしました。（あおき）

地域史講座 9月30日・10月7日・10月14日

「失われた水辺を探る―豊島区の湧き水をたずねて―」を終えて

今秋も恒例の地域史講座を開催しました。今回のテーマは「湧き水」です。一九八九年度の「弦巻川・谷端川跡をあるく」、昨年度の「水窪川・谷戸川跡をあるく」に引き続き、第三弾の企画です。

ここ数年住民の井戸や湧き水への関心が高まり、小中学校では総合的な学習の時間などで環境教育が重視されています。

湧き水とは台地が谷状になった場所で地下水が地表に現れた瞬間をいいますが、

川の水源となるほか、飲用水や生活・灌漑用水（ため池）に利用され、私たちの

暮らしに密接な存在でした。区内の湧き水が高田・駒込地域に集中している（いた）ことは、地形図や古老の話からある

程度把握していましたが、今回は防災課や環境保全課、郷土史研究者の協力を得て湧き水地点の情報収集を行いました。

その結果、31か所の湧き水や池（跡）が確認できました。

二回の見学会（参加者約20名）では、

①高田・雑司が谷地域（学習院・高南小学校・金乗院・根生院・南蔵院・弦巻川付近）と、②巣鴨・駒込地域（巣鴨青果市場、谷戸川流域、染井の植木屋跡、駒込一丁目付近）を約4km歩きました。

かつて水が豊かだった豊島区の景観を想像しながら、今では住宅地や道路となった湧き水や小川の跡、マンシヨンの谷間に残る池などを見て歩きました。

次に参加者の声を一部ご紹介します。

◆昔の川筋・地形の高低を見ながら歩くと、今建物が立っているもとの姿が想像される。豊島区に野性のドジョウ・沢ガニがいることに驚く。〈51歳・男〉

◆池袋に引越してきて1年弱なので、豊島区のことを少しでも知りたくて考え参加しました。昔の様子がおぼろげながら分かってきたような気がします。〈57歳・男〉

高南小学校の湧き池にて



◆「川」に続いて湧き水。生活に密着した問題を取り上げられた意義を大きく評価したい。何れも埋められて昔日の面影もなく、環境保存からいろいろ問題がある。〈84歳・男〉

◆豊島区にもせせらぎのような川の流ればほしいと思います。〈77歳・女〉

アンケートをみると、参加者にとって今回の講座は地域の再発見の機会となったようです。また参加者から新たに4か所の湧き水地点を教えてくださいました。湧き水マップの作成にむけて今後も引き続き調査を続けていきます。湧き水情報をお寄せください。なお、見学会の資料は当館でご覧いただけます。【横山】

学生芸員になりたい！

実習生は五人。学芸員の資格を取得するために受け入れる大学生たちです。一方、実習をさせる人、つまり講師は館長はじめ学芸員。さまざまな内容の実習をするために文化財協力の協力も得て実施しました。では、のべ一二日間の実習内容を簡単に紹介しましょう。

- 1 資料館の管理運営と事業運営
 - 2 施設見学(各所の収蔵庫と雑司が谷旧宣教師館)
 - 3 現代資料の調査と報告書の作成
 - 4 民俗調査・館外調査の方法と技術
 - 5 生活資料の整理方法と技術
 - 6 文書資料の整理方法と技術
 - 7 文化財保護の実務
 - 8 埋蔵文化財の発掘
 - 9 図書資料の整理方法
 - 10 展示シナリオの作成
- 実習生は、これらのことを室内の講義で実習したり実際に実測用具を手にして

資料の大きさを計ったり、さらに撮影して写真の焼き付けもします。資料はきれいなものばかりではありませんので、マスクをしながらの作業もあります。また、作業は館外でもします。区民の方の家のうかがい、地域の歴史のひとつまを教えていただき、それをメモにとることや神社の石造物を調査させていただくこともあります。つまり、当館の学芸員がふだん行っていること(それに近いこと)を経験してもらっているのです。

どこからか、「それならわたしも実習生になりたい！学芸員になりたい！」という声が聞こえてくるようです！

博物館実習は、館に勤務するものにとって学芸員になったときの初心を思い返す機会であったり、外の世界の新鮮な空気を吸収できる期間でもあります。

今年も、いくつかのエピソードと成果を残して実習を終えました。 [福岡]

□炬燵集末後記□

「かたりべ」60号をお届けいたします。これが、今世紀最後の「かたりべ」となりますが、予定通り、二〇世紀のうちに60号を発行し、ひと安心です。

世紀末とは無関係ではありませんが、現在郷土資料館は決して望ましい状況には置かれていません。二一世紀こそ明るい未来が来ると信じたいのですが……郷土資料館の事業が正常にもどるのは、もう一回ミレニアムを経ないといけないのかもしれない。 [伊藤]

かたりべ
(第一版)

No. 60

2000年11月30日発行

印刷/発行
豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

☎03-3980-2351